

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第114号 2024年6月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

|  |       |    |
|--|-------|----|
| コラム 「学歴ロンダリング」を許さない?                             | 山本 剛  | 2  |
| コラム こもれび博物館による資料目録作成<br>-「柳沢竹蔵」という人物に迫る-         | 八田 友和 | 8  |
| 体験的文献紹介(63)<br>- 岡山県と広島県の中学校史探索 -                | 神辺 靖光 | 13 |
| 大東文化大学文学部教育学科の増設<br>-1972(昭和47)4月開講-             | 谷本 宗生 | 22 |
| 大正時代の女子高等教育(69)<br>神戸女学院 —Kobe College 高等科から専門部へ | 長本 裕子 | 25 |
| 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(3):<br>『最近東京遊学案内』(明治40年)(1)    | 吉野 剛弘 | 30 |
| 旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(9)                              | 富岡 勝  | 35 |
| 刊行要項(2015年6月15日現在)                               |       | 37 |
| 短評・文献紹介  |       | 38 |
| 会員消息   |       | 39 |

## コラム

### 「学歴ロンダリング」を許さない？

やまもと たけし  
山本 剛

(有明教育芸術短期大学)

東京大学の赤門前、東大大学院生であるという学生に、YouTuberは、その出身大学を尋ねる。彼の出身校が東京大学以外の大学であれば、YouTuberは、「学歴ロンダ！」と叫ぶ。

なるほど、大学受験で満たされなかった思いを大学院受験で果たし、偏差値の高い大学(院)に移動して、最終学歴を塗り替えることができた、いわゆる「学歴ロンダリング」成功者であると捉えて、彼を揶揄する動画であろうか。

吉見俊哉氏も指摘しているように、多くの大学では、学部入試よりも大学院入試は相対的に低いハードルとなっている<sup>1</sup>。そのために、最終学歴をより偏差値の高い大学の大学院卒にしようとする「学歴ロンダリング」現象が話題となる。しかしながら、大学院の入学資格には、自校の学部出身者に限るという規定はないし、大学院で学ぶための一定の学力水準に達している者を大学が適切に選んでいれば(修士論文を書いて卒業しなければならない)、特に「学歴ロンダリング」を揶揄することはない。高校卒業時の18歳時点の入学試験に局限して、どの大学に入学するかで、今後の人生が決定するというのはおかしな話である。どのような経路をたどろうと、生涯を通じて、学びたければ、大学などはいつでも何度でも、入学できるほうが望ましい。吉見俊哉氏も、「人生で3回大学に入学する」と、言っているではないか<sup>2</sup>。

しかし、そうは言っても、先のYouTube動画にあるような大学院入試で、偏差値の低い大学から移動できた者を「学歴ロンダ！」と揶揄するというのも、その根底に日本社会の教育に対する認識がきわめて深刻な事態に陥っていることの現れではあるまいか。それは近代日本の教育の根の深さをあらためて感じざるを得ないのと同時に、暗澹たる気持ちにさせるものである。「正系」の進学ルートをとらずに、「傍系」のルートで上級学校に進む者に対しての「憤懣」、つまり、いまだに「受験」をめぐる何かに囚われた観念をみるのできるのである。

100年ほど前の昭和初期、1930年代の東京工業大学もまた、「受験」をめ

ぐって学内は騒然となっていた。東工大の学生たちは、毎年、同大学の入学試験が近づくと、志願者と合格者の出身校の学校種を話題として、旧制高校と官立の高等工業学校以外の「傍系」入学者を批判していた。

当時、同大学の入学資格は、旧制高校と高等工業学校だけではなく、一般の専門学校卒業生をも包含する、極めて広い学校種に門戸が開放されていた。帝国大学が旧制高校からの進学者を「正系」とするのならば、東工大の場合は、旧制高校と高等工業学校からの進学者が「正系」、その他の学校種からの進学者が「傍系」であった。この「傍系」のなかに、「大学予科ヲ修了シタル者」、つまり、私立大学予科からの進学者がいたことに学生たちは憤慨した。

『東京工業大学学友会十年史 昭和四年—十四年』には<sup>3</sup>、1932(昭和 7)年から 1939(昭和 14)年までに『蔵前新聞』に掲載された入学者に関する内容が「入学志願資格問題」と題して、まとめられている。同書を見ると、興味深いことに、今日で言うところの(偏差値の高い)東京工業大学大学院に、(偏差値の低い)私立大学から「学歴ロンダリング」を成功させた者に対する「憤懣」の投稿があふれている。

正系ルートで入学した東工大生たちは、同大学の入学資格改革を訴えていた。同大学の入学志願者のなかには、高等学校と高等工業学校以外のその他の専門学校、あるいは、私大予科等からの、いわゆる「傍系の出願者が相当多く」、「高等農林、高等商船、薬専等と凡そ畑違ひ」の学校種がいることは、「結局入学出来るのは特別優秀な少数」であるとはいえ、あまりに入学資格が「無制限で雑駁であり過ぎ」るのではないかと学校当局を批判した。そこで、学生たちは「傍系を清算せよ」、「傍系排撃」、「傍系の徹底的な厳選」と論陣を張り、ついには、同大各科で「傍系清算せよ」との署名活動を行い、「学則改正運動」歎願書を作成して、学校当局に提出することを決議した。入学資格は、「高等学校理科卒業者」、「高工及び教員養成所卒業者」、「学力検定者」、「文部省令に依る学士号所有者」に限るべきだ。つまり、私立大学予科と他の専門学校からの入学者は排除すべきだというものである。

これに対する大学当局は、学生の意向を汲み、「早く何とか研究することを約束」して、現時点では、「学校として処理に困る」と学生を説得し、なんとか「歎願書及署名」の提出は見合わせることにさせた。ついで文部省は、「私立予科」から東工大に入学できることは目下のところ、別に「違法」ではないが、こうしたことが「無制限に行はれ色々弊害」があるようなら、なにか「工夫」をしなければならぬと述べ、東工大の入学資格が「非常な広範囲」の学校種から認められるという学則の規定がある以上、文部省が容喙することではないが、学校当局と「相互に研究して何とか」したいとの見解を学生に伝えた。

学生たちの主張の根底には、言うまでもなく、自分たちが官立学校入試の「受験激戦地帯」を突破して、旧制高校や官立の高等工業学校を経て、入学したのに、入学難易度の低い（無試験）私立大学予科生が少数の科目入試で東工大に入学してくることに納得がいけないということである。つまり、それならはじめから受験の戦略として、入学が容易な私立大学予科に入学して、そのあとは容易に東工大に入学することができるのではないかという論理である。これは、今で言うところの「学歴ロンダリング」で、論文や面接等の簡単な試験で、難関大学の大学院に入学することは許せないという心情であろうか。

1932年度の入試では、「日本大学予科」からの受験者が多数あり、かなりの合格者を出したことに、学生たちは過敏に反応した。彼らは、「傍系入学者」には「低劣な奴が多」と述べて、世間では、東工大が、「日本大学予科」や「物理学校（現：東京理科大学）」からの「傍系入学者の工大（東京工業大学）」と揶揄されており、そのために、「正系」の旧制高校生は、そのような東工大は敬遠されて、「高校生（旧制高校）の工大（東京工業大学）」ではあり得なくなっている現状を訴える。なお、翌1933年度の日本大学予科からの志願者は20名、うち入学者は5名、物理学校からの志願者は3名、うち入学者は1名であり<sup>4</sup>、実際の入学者は少数であったが、東工大生からすると、同大学に私立大学からの志願者が多いということが許せないのであった。

ところで、この時期、1935年の『官立大学傍系者・独学者入学受験法』とい

う受験雑誌を見ると<sup>5</sup>、同書には、「各大学の傍系入学受験資格」として、「私立大学予科修了の資格」で受験できる官立大学は、九州帝国大学法文学部と東京工業大学の2校があげられている。そして、これらの学校は、「二年制と三年制の両者の大学予科、さらに、昼間部と夜間部を問わない」、「文科系統も理科系統も問わない」、「要するに大学令による大学予科であればよい」と、どの私立大学予科からでも官立大学に進学できる可能性があることを示唆していた。

先の東工大の学生たちの議論にもどると、東工大に傍系ルートで入学した「一傍系出身者」（私学出身者か？）と称する学生の投稿も掲載された。彼は嘆く。傍系入学者には「裁かれる者の悲しさ」があり、自身の意見を述べるのができない。しかし、なぜこれほど傍系入学者を「侮辱するのか」と…。我々は、なにも違法な方法で、東工大の「入学試験にパスした」わけではない…。

これに対して、正系ルートの入学者は、旧制高校の入試を経ないで、「入学容易」で、「あまり勉強する事の不要な」私立大学を卒業して、「首尾よく」東工大に入学することは、「要領を得た方法」であると即座に批判する。さらには、東工大の「折角の門戸開放もその真価を傷つけられ」、私学生の受験の戦略に「利用され」ていると論じる。

実際、東工大では、1942年度の入学資格は「学習院高等科理科」（旧制高校）の卒業者を認め、「大学予科ヲ修了シタル者」の規定は除かれることになった<sup>6</sup>。

一方で、1929年から東工大の教授であり、自身も中学校は2年修了のみで、専門学校や旧制高校の入学経験がなく、東北帝国大学に入学した永海佐一郎は、その著のなかで<sup>7</sup>、大学の入学資格について次のように述べる。すなわち、私は、規則が改正される機会のたびに、入学者の資格を、「高等学校又は高等工業学校、其の他高等専門学校を卒業しない人」で、「比較的容易な方法」で、本科生として入学させるよう要望してきた。つまり、「学校を卒業しない向学心に燃えてゐる青年」のための入学制度の改革を訴えてきた。

また、先の投稿の中には、「私学と官学出身者を同様に取扱ふ」ことを「不当」

とするというのは、「官学万能」を説いた「昨日の思想」であると批判して、「官学を出て私学出の者と同一視されるのを心よく思はないのは小さなひねくれであらう」と喝破する者もいた。彼は次のように言う。すなわち、「仮令全く畑違ひの所に育つたとはいへここに翻然その志を変へて斯業に大成せんとする者を何を嫌つて排斥するのであらうか。或ひは逆境にありてノルマルコースを取り得なかつた人々の為に、本学の如き広範囲な入学資格を与へもつて此の方面に人材を拾ふ学校が全国に一つ位あつても良いであらう。試みに之を数年後の世に問ひて名声を待たう。「私学出身の人を拒絶」するというのは、「アナクロニズム」である。「もっと工大は開放的自由主義的であつて欲しい。だれでも入られる明朗に学べる所でありたい」。

さて、現在、筆者は「だれでも入られる」私立短大に勤務している。短大に入学してから学問に出会い、自らのやりたいことを明確にした学生のなかから、大学院を志す者がでることを期待している。

「元来私大の予科から志願」することは、東工大の入学資格の「広範な所をねらった」、「全く変格的」なものであり、これでは旧制高校生より修業年限が短い私立大学予科生が「非常な得」をするので、私学生からの入学者が増えるのは「憂慮」される、と言われた時代から、100年ほどが経った今日、「学歴ロンダリング」と揶揄されながらも、「試みに之を数年後の世に問ひて名声を待たう」。

#### 参考文献

- 1、吉見俊哉『大学とは何か』（岩波新書、2011年）、229頁。
- 2、吉見俊哉『大学は何処へ』（岩波新書、2021年）、198頁。
- 3、『東京工業大学学友会十年史 昭和四年—十四年』（東京工業大学学友会、1939年）。
- 4、『東京工業大学百年史』通史（東京工業大学、1985年）、531頁。

なお、『文部省年報』による「大学予科修了者」の数字とは若干の違いがある。東京工業大学の学部学生の出身学校種別の人数は、岡田大士『東京

工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究』(博士論文、2005年)に詳しい。

5、野口絢齋編『官立大学傍系者・独学者入学受験法』(大明堂書店、1935年)。

6、『東京工業大学一覧 自昭和十七至昭和十八年』(東京工業大学、1942年)。

7、永海佐一郎『大自然の力と私の反省』(恒春閣書房、1943年) 101頁-104頁。

(3~7は、すべて国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧が可能)

## コラム

### こもれび博物館による資料目録作成 —「柳沢竹蔵」という人物に迫る—

はった ともかず  
八田 友和

(こもれび博物館)

## 1. はじめに

本稿では、「こもれび博物館」が収集した柳沢竹蔵(大正～昭和に活躍した兵庫県議会議員)関連の資料を題材に筆者が行った調査・研究について整理する。

## 2. 柳沢氏の資料を扱った経緯

まず、本資料を扱うことになった経緯を簡単に紹介する。

こもれび博物館は絵葉書や軍事郵便の収集を行っている任意団体である(こもれび博物館の概要については、前号を参照のこと)。

2023年度にインターネットオークションで購入した資料のなかに、柳沢竹蔵という人物に宛てた大量の郵便物(葉書・封書)が紛れていたことが資料との出会いであった。差出人をみると大正～昭和時代に活躍した兵庫県知事や兵庫県書記官、内務部長、警察署長など、名だたる人物ばかりで「この柳沢竹蔵という人物はいったいどんな人なんだろう…」という想像だけが膨らんでいった。試しにインターネットで検索したが、全くヒットしなかった。それが筆者の好奇心をより一層刺激した。

## 3. 調査の経緯①: 資料から予想を立てる

柳沢竹蔵に届いた葉書を見ると、ほとんどの葉書に「当選を祝す」「当選御祝」といった文字が確認できた。ここから、「柳沢竹蔵は首長か議員だったのではないか」と推測した。加えて、葉書や封書に残っている消印や住所からおおよその時期や居住地も確認できた。そこで、「柳沢竹蔵は、兵庫県揖保郡太田村(現在の兵庫県太子町)を拠点に活躍した大正～昭和期の政治家」だと予想をたて、調べることにした。



#### 4. 調査の経緯②：図書館の活用

次に、国立国会図書館のNDLサーチで「柳沢竹蔵」「柳澤竹蔵」で検索をかけたところ、2件の文献がヒットした。そのうちの一冊『大津茂川の流れ』（柳沢正著、1980年）が兵庫県立図書館に収蔵されていることが確認できたため、同日、図書館を訪問した。

当該図書を当たったところ、柳沢竹蔵の来歴やエピソードが2頁にわたって紹介されており、どのような人物か概要を把握することができた。この時点でおおよそ下記の情報が入手できた。

明治十七年に兵庫県太田村（現在の兵庫県太子町）に生まれる。  
大正三年に村会議員に当選したのち、村長、県議会議員などを務める。  
その他にも、揖保郡石材組合長・西播トラック組合長など、十指に余る公職を兼ね、教育・地方産業・道路・河川行政などに貢献している。

そのうえで、県立図書館のレファレンスサービスを活用した。県立図書館には「ひょうごふるさと情報室」が設置されており、兵庫県に関係する資料が網羅的に整理されている。そのため、「県議会」や「兵庫県にゆかりのある人物」の情報が入手しやすいと考えた。

レファレンスサービスを活用するにあたって、柳沢竹蔵に関して現時点で分かっていることを伝え、兵庫県議会の歴史がわかる資料や太子町に関係する資料を紹介してもらった。県立図書館には、その後も複数回訪れ、レファレンスサービスを活用した。その結果、顔写真や柳沢竹蔵の概要について知ることができた。

#### 5. 調査の経緯③：博物館の活用とフィールドワーク

柳沢竹蔵についてある程度の情報を有した状態で、同氏の出生地である兵庫県揖保郡太子町を訪問した。訪問の目的は、①太子町立歴史資料館で学芸員

の方にお話を伺う、②太子町立図書館のレファレンスサービスを活用する、③現地をフィールドワークする、の3点である。

まず、太子町立歴史資料館を訪問した。同館では、専門員の方が対応して下さった。専門員の方は同氏について御存じであったものの、資料館として柳沢竹蔵氏に関係する資料は所蔵しておらず、案内できる情報はないとのことであった。しかし、同館が販売している図録や資料に数ページであるが、柳沢氏が取り上げられていることがわかり、結果として大きな収穫を得ることになった。

次に、太子町立図書館を訪問した。事前に同館のサイトから「柳沢氏に関する資料の有無」を問い合わせていたため、ある程度の目星をつけて資料を探すことができた。また、スタッフの方が丁寧に対応して下さり、「禁帯出の資料閲覧」や「資料の複写」のサポートをして下さった。

最後にフィールドワークの概要を整理する。歴史資料館を訪れた際、専門員の方が地図を広げながら「(柳沢氏は)昔このあたりに住んでおられた」「〇〇さんだったら知っているかもしれない」と説明して下さった。そこで、教えていただいた場所を中心にフィールドワークを行った。しかし、残念ながら新たな情報を得ることはできなかった。また、専門員の方から紹介いただいた方はご不在のため、お話を伺うことができなかった。

## 6. 調査の経緯④: 資料目録の作成

最後に、これまでにわかった情報を踏まえて、こもれび博物館が所蔵する柳沢竹蔵関係の資料目録を作成した(約600点の資料を取り上げている)。目録は非売品であり、インターネット上でも公開していないため、目次を簡単に紹介する。

|            |     |
|------------|-----|
| はじめに       | … 2 |
| 柳沢竹蔵プロフィール | … 3 |
| 柳沢竹蔵年譜     | … 4 |
| 目録         | … 6 |

|         |      |
|---------|------|
| 葉書      | … 6  |
| 名刺・年賀名刺 | … 16 |
| 封筒      | … 17 |
| その他     | … 23 |
| 編集後記    | … 25 |
| 謝辞      | … 25 |

## 7. 今後の展望

今後の展望として二点取り上げ整理する。

第一に、今回の探究を一つの事例として、勤務校の生徒に紹介することが考えられる。今回の取り組みでは、「図書館・博物館の活用」「データベースの利用」「フィールドワークの実施」などを適宜組み込みながら探究を行った。生徒たちが行う探究学習においても、本実践と同様に地域の人的・物的資源を活用した探究学習が求められている。そこで今回の取り組みを、探究学習の一つの事例として生徒に紹介し、探究学習を行う際の参考にしてもらいたいと考えている。

第二に、今回の取り組みを継続することが挙げられる。資料目録を作成した次の段階として、①調査・研究で明らかになったことを研究ノートや報告レポートにまとめる、②成果を積極的に発信していくこと、などが想定できる。できることから取り組んでいきたい。

## 8. さいごに

本稿では、筆者が行った柳沢竹蔵の調べ学習について紹介した。

筆者自身、今回の取り組みを通して「知らないことを知る楽しみ」を改めて感じた。学校の課題のように「誰かに指示されたから調べる」といった受け身の学びであれば、途中であきらめていただろう。自分自身が気になったから調べた・追究した…という背景が本実践を継続できた原動力だと感じている。自分自身が感じた「なぜ?」「どうして?」という疑問や違和感を出発点に探究学習を展開で

きるように、今後も考えていきたい。

**【謝辞】**

本研究を行うにあたって、以下の方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

荒木虹太、八田真椰、峯畑絵美

太子町立図書館、太子町立歴史資料館、兵庫県立図書館

## 体験的文献紹介(63)

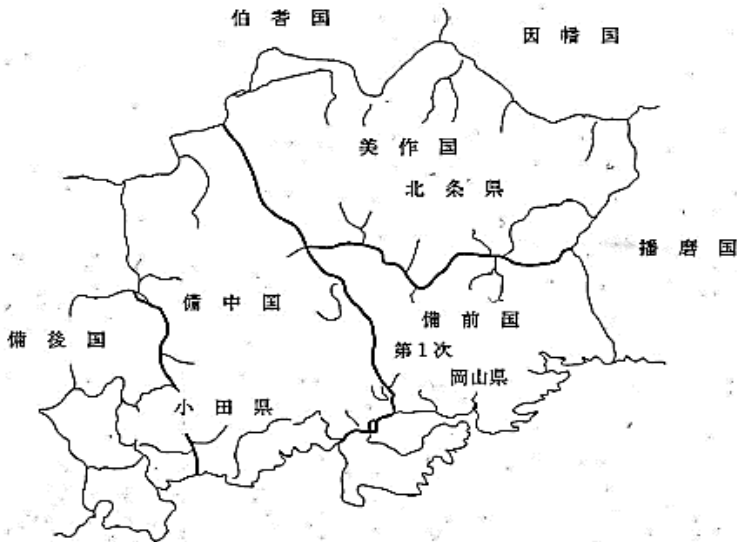
### － 岡山県と広島県の中学校史探索 －

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

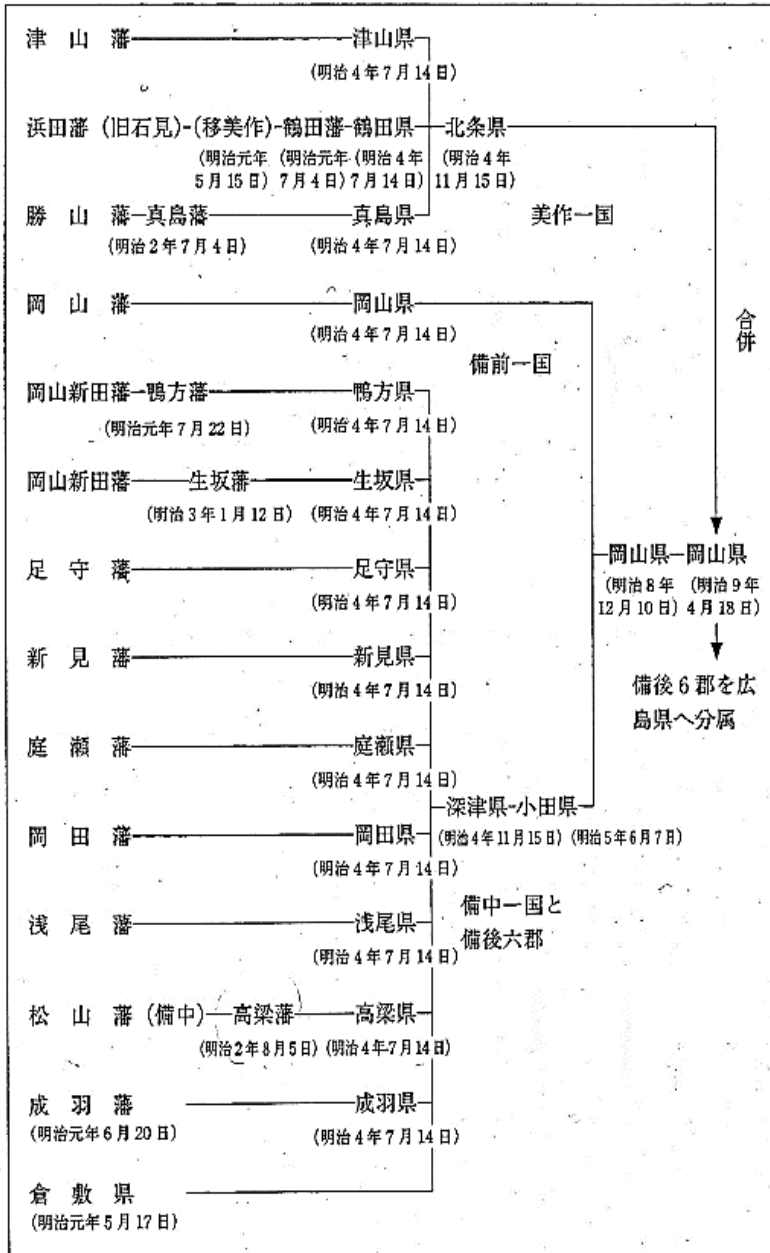
足元の兵庫県教育史探索が一応終わったので隣県・岡山の学校史資料探索を計画した。5月、ゼミ生一同と自家用車数台を揃えて探索した後は岡山出身のY君と二人で出かけることが多かった。

岡山県は〔図1〕にみるように美作・備前・備中・備後の一部から成っている。そしてそこにある14藩が明治初年、合併させられて岡山県になった。即ち美作国10万石の津山藩に鶴田藩6万石、真島藩2万石が加わって美作一国が北条県になり、備前一国を領有した池田家31万石が第1次岡山県になり、備中及び備後6郡に散在した鴨方藩以下の9藩がまとめられて深津県→小田県になり、これらをまとめて明治9年、現在の岡山県が成立したのである。



〔図1〕 明治初期の岡山県・北条県・小田県分郡図  
(明治14年・内務省「第日本府県分割図」による)

[表1] 岡山県の沿革



(谷口遼夫『岡山県の歴史』山川出版社 166頁によってつくる)。

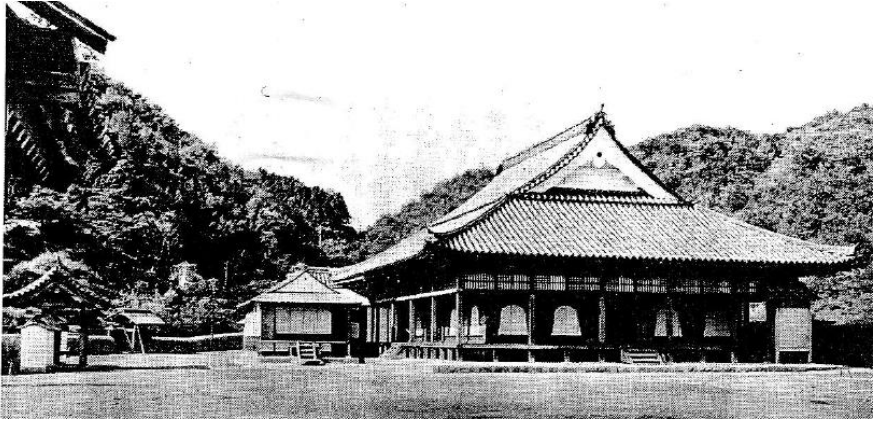
岡山県の中学校は旧藩がつくった学校が切れ目なく続いたことを知っていたから3県時代の中心都市である岡山市、倉敷市、津山市の図書館・文書館、また近世学校こうえいの後裔とされる現高等学校の資料室等を尋ねまわった。

備前の岡山からはじめよう。岡山藩は寛永9(1632)年、池田光政の入部にゅうぶ(藩主になる)からはじまる。31万石余の外様大名である。池田光政は当時としては稀有な好学大名で寛永18(1641)年、上道郡花畠に「花畠教場」という藩校けうを設けた。この学校は25年後の寛文6(1666)年、岡山の内山下に移されて石山仮学館と称し後年に続いた。このように早くから家臣に学問をさせたことも注目されるが、身分の低い小侍こざむらいや一般庶民のための学校→郷学校を領内の各地につくらせたことが岡山藩文教政策の特徴である。

ここで中世末期の織豊時代に現れる「郷士ごうし」とか「郷学校ごうがっこう」について説明しておこう。

織田信長は美濃方面の戦いくさが終り、家康との同盟で東海方面が治まると積極的に北陸方面と山陰山陽方面侵略の戦争をはじめた。信長の死後、これを受け継いだのは豊臣秀吉である。彼は侵略地の大名は殺害するが、降伏した家臣たちは助命し、僻地である郷村に追放する。侵略者・秀吉は敵陣の城に入り、その城下に自分の部下を住ませる。ここに近世に続く城下町が成立したのである。郷村に追放された郷士ごうしたちは降伏し助命されたのだから、恩返しに戦いくさの時は臣従することを誓う。そして戦闘がはじまれば甲冑具足かっちゅうぐそくをかついで馳せ参じるのである。彼らを一両具足と呼ぶ所もあるが、一般にこれを郷士と言うのである。「田舎侍いなかざむらい」の蔑称であった。

さて当時としては進歩的な考えの池田光政は寛文8(1668)年、「百姓少年者」の学校として領内23ヶ所に手習所を設置した。しかし生徒が思ったほどには集まらなかったので替りに閑谷かわ しづたにに学校をつくることになったのである。光政は学校奉行の津田長忠に閑谷学校設置を命じた。彼は学田がくてん・学林がくりん等の財源をつくったり、建築技術を駆使したりして元禄14(1701)年、閑谷学校開校に漕ぎ着けた。生徒は庶民の子どもを主体として家中武士の子弟及び他領域の子弟でも



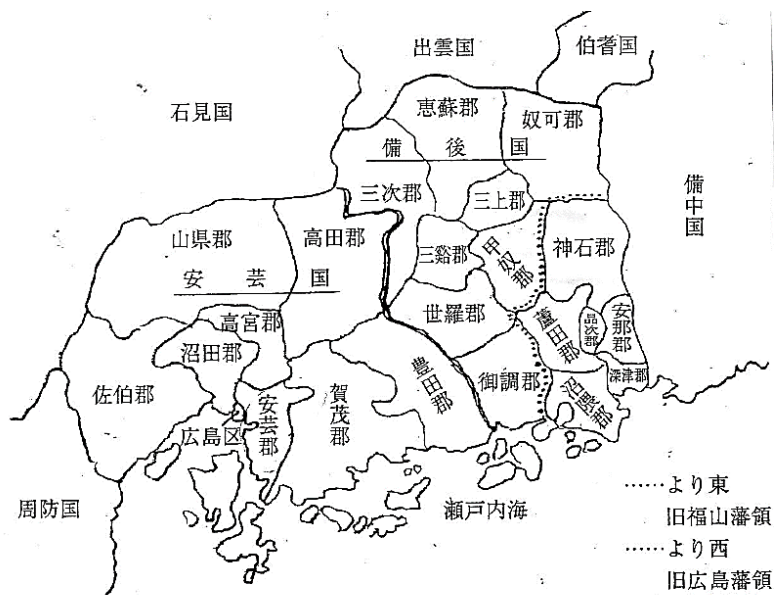
### 閑谷学校講堂

よいと言うのだから藩校とは言えない。しかし学習は次第に朱子学本位になり藩校らしくなった〔藩校のようになった？〕。廃藩に際して閉校したが明治6(1873)年、備中の儒者・山田方谷を迎えて再開した。ところが明治9年、岡山の旧藩校を追われた遺芳館が入り、再開の閑谷学校は山田の病気もあって閉鎖した。遺芳館は池田学校と改称したが明治9年、閉鎖。ここに於て閑谷学校再々校の議が興り、御野、和気、邑久、赤坂5郡長の尽力で再校した。新生の閑谷学校は各種学校の扱いだだったが、進学予備校になり、明治37年には私立中学閑谷校になり後年に続く。

備前岡山と閑谷学校の調査を終り、備中の私立興讓館中学校の前身と思われる郷学・興讓館のことを調査する。備中・後月郡<sup>しつき</sup>一帯は一橋徳川家の領地であった。この領主は江戸に<sup>たいざい</sup>滞在して、この地に来ない。それでこの地の豪農層が一橋家の意向を受けて郷学興讓館を設置維持したのである。武士が少数だから当然、郷学になるのだろう。幕末の嘉永6(1853)年、在地の儒者・阪谷朗蘆、次いで阪田警軒を教授者として郷学興讓館が始まった。幕末維新时期はそのまま継続し、明治7(1874)年、私立中学興讓館、明治41年、中学校令による私立興讓館中学校になった。現私立興讓館高等学校である。



以上、岡山県教育史研究の一次史料として「旧備前藩学校取調所」明治17年（岡山大学図書館池田文庫蔵）があり、参考文献としては岡山県教育会『岡山県教育史・中巻』、興譲館高校『興譲館百二十年史』、谷口澄夫『岡山県の歴史』、熊沢恵理子『幕末維新时期における教育の近代化に関する研究』等がある。



「明治十四年・大日本府県分割図」による。

〔図2〕 1876年以後の広島県分郡図

〔表2〕 1873年・第四大学区別人口

|     |             |            |
|-----|-------------|------------|
| 広島県 | 94万 1,978人  | 計数は明治6年12月 |
| 小田県 | 60万 8,353人  |            |
| 北条県 | 21万 5,600余人 |            |
| 鳥取県 | 38万 5,607人  |            |
| 島根県 | 34万 0,065人  |            |
| 浜田県 | 26万 2,033人  |            |
| 山口県 | 82万 9,579人  |            |
| 愛媛県 | 76万 8,800余人 |            |

（『文部省第一年報』78～92頁）。

[表3] 1880年の広島県区郡別人口・士族戸主数表

| 国   | 区郡        | 人口       | 士族戸主数 |
|-----|-----------|----------|-------|
| 安芸国 | 広島区       | 7万6,890  | 4,137 |
|     | 沼田郡       | 4万0,555  | 413   |
|     | 高宮郡       | 3万3,523  | 36    |
|     | 安芸郡       | 12万7,316 | 430   |
|     | 佐伯郡       | 10万5,736 | 227   |
|     | 山県郡       | 5万5,807  | 2     |
|     | 高田郡       | 6万4,185  | 24    |
|     | 賀茂郡       | 10万7,547 | 11    |
|     | 豊田郡       | 10万8,377 | 6     |
| 備後国 | 御調郡       | 10万9,425 | 293   |
|     | 甲奴郡       | 1万7,295  | 1     |
|     | 世羅郡       | 3万2,262  | 1     |
|     | 三谿郡       | 2万1,371  | 1     |
|     | 奴可郡       | 2万3,507  | 7     |
|     | 三上郡       | 1万3,435  | 0     |
|     | 三次郡       | 3万2,374  | 19    |
|     | 恵蘇郡       | 2万3,108  | 3     |
|     | 蘆田郡       | 3万3,267  | 18    |
|     | 品治郡       | 1万7,431  | 7     |
|     | 安那郡       | 2万5,983  | 14    |
|     | 深津郡       | 4万6,748  | 2,054 |
|     | 沼隈郡       | 7万1,871  | 51    |
| 神石郡 | 2万5,139   | 12       |       |
| 合計  | 121万3,152 | 7,768    |       |

内務省戸籍局『明治十三年一月一日調・日本全国人口表』による。

殆んどが山地である。そして瀬戸内海に散開する大小無数の島嶼が眼に入る。山地とは言え1000メートルを越える高山はわずかで殆んどが500メートル級の低山である。この高原を耕し、海岸で魚介類を捕ることで人々は生きてきた。この地はまた古くから山地に鉄、海浜に塩の特産があり、海路や街道を通じて各地に売られ富をもたらした。この地は早くから商業に目覚めていたのである。

岡山県に続いて広島県の学校史料探索をすることにした。大学院神辺ゼミ生に広島県出身者がいなかったため、広島大学出身の助手A君を誘った。A君はよく私を助けてくれた。[図1]と[表2][表3]を見ながら明治16年から17年にかけて広島県内を学事巡視した文部大書記官・西村茂樹の次を聞かれない。

広島県ハ安芸備後ノ二国ヲ管轄ス。其中、安芸全国ト備後ノ八郡ハ浅野家ノ旧領地ニシテ(中略)残り備後ノ六郡ハ阿部家の旧領地ナリ。是ヲ分ツテ広島地方、福山地方トス。此両地ハ今ニ至ルマテ人情風俗大ニ同ジカラズ

上記に従って本稿はまず広島地方の教育史を述べ、次いで福山地方を略述しよう。

広島県の自然地図をみると

この地方は中国地方とも呼ばれる。京都と西国(九州)の中間という意味で南北朝時代に言われた。中国探題、中国管領などの官職名もある。毛利氏が広島に盤踞し京都以東の武家勢力の脅威となったからである。関ヶ原の一戦で西軍が破れた後、毛利氏が防長2州に閉じ込められると浅野氏が広島に入封した。毛利氏の見張り役として徳川氏が企てたことである。果して幕末、長州藩は倒幕軍の一勢力として立ち上がり刃向かってきた。

この幕末の長州戦争で浅野の広島藩は幕府方征長軍の前線基地になり、先鋒になったが、実際は戦わず、幕府と長州藩の間を周旋し、遂には薩長と軍事同盟を結んだ。しかしその後、急転回する政局に追いつかず、大政奉還に際し佐幕の土佐藩と結んだため薩長と間が阻隔し、維新後の藩閥政治に参画できなくなったのである。

しかし維新後、安芸広島は新政府に注目された。まず軍事上の基地として明治6年1月第五軍管広島鎮台<sup>ちんだい</sup>となり瀬戸内海を囲む中国地方と四国全県を管轄する軍事拠点になった。次いで明治19年の海軍条例によって広島市に近い<sup>くれ</sup>呉に第二海軍区の鎮守府が置かれた。神奈川県横須賀、長崎県佐世保<sup>させぼ</sup>と並ぶ連合艦隊の基地である。日清日露の戦争では呉軍港が、朝鮮・支那に渡る大軍事基地になった。政府はこれあるを予測して日本国中の兵士や軍需物資が広島湾に集結するように鉄道その他の輸送路を完備した。それが効を奏し開戦とともに広島は一大兵站<sup>たん</sup>基地になったのである。広島県はさらに在地の鉄生産を応用して鉄製軍用具を大量生産させたので軍需品生産県にもなった。そればかりではない。戦争の総司令部たる大本営まで広島に移して、大元帥・明治天皇はじめ総理大臣、陸軍参謀総長以下がこの大本営で戦争指揮をとったのである。まさに未曾有<sup>みぞう</sup>のことであった。

近代日本の制度化は<sup>きょこく</sup>挙国一致の軍事化が先頭を切ったが、それに続くのが学校制度であった。即ち戊辰戦争が終るか終らぬかの明治3年、「大学規則」「中小学規則」が公布されて小学→中学→大学の進学制度が示され、5年、6年の「学制」で各学校の学区が詳細に示された。教育行政の基本になる8大学区が決められたが、瀬戸内海を囲む中国地方・四国一帯の大学区の本部は陸

軍と同じ広島であった。大学区本部ともなれば近き将来、大学がたてられる筈だし、それを予測させる官立外国語学校→英語学校もはじまった。中央権力の動向に敏感なこの地域の旧藩主や重臣たちは動き出すが、まず県の役人が管内の私塾を私立中学校とした。明治7年から11年の5年間に開業した広島県の私立中学校は45校で、359校という圧倒的な東京府を例外とすれば他府県に比べて多く、47校の岡山県に次ぐ。(京都府は私塾は多いが私立中学校にできなかった。理由は割愛)。

この広島県の私立中学校の中で突出した異色は明治11年開校の浅野学校である。旧藩主浅野長勲(在東京)<sup>ながこと</sup>が私財を投じて広島上流の町に校舎・寄宿舎を新築して開校した。14年旧藩校教授の山田養吉が藩校名をとって修道学校と命名、校長になったが、浅野家との間に確執があり、明治19年、浅野家はこの学校の廃止を告げた。しかるに山田校長は肯んぜず<sup>がえ</sup>、器物、書籍等を譲り受けて広島八丁堀の自宅に校舎を写し高等専門学校の予備校として継続した。これがその後、曲折をへて明治38年、私立修道中学校になったのである。

広島県の東部・深津郡には福山藩校・誠之館を継いだとされる広島県立福山中学校があるが、これを語るには石井英太郎なる人物を紹介せねばならない。石井は深津の農民、23歳で家督を相続して庄屋になり、明治2年福山藩公議局の議員になった。また備後6郡が小田県に合併されると誠之館の後裔<sup>こうえい</sup>・士族共立小学誠之館を備後6郡の義倉社倉金で買とり、これを小田県師範学校にした。そしてこれを母胎にして福山中学校を誕生させたのである。石井は小田県時代、第二大区(深津郡)の区長であり学区取締であり、広島県議会の初代議長であり、福山中学校の校長でもあった。このように地方政治・行政の主脳を勤めたが、彼の真骨頂は父がつくった福山義倉社を守りそれを盛大にしたことである。地域住民の幸福・発展のために財を蓄え、それを有効につかう。このような近代的財政力を持つ人物こそ当時の日本が渴望した指導者であった。福山中学校は広島県立誠之館高等学校として現在に続いている。

広島県の教育史史料[史資料 ?]は広島大学を中心によく開発され、整理されていた。それらの史料により、優良な県教育史も公刊されている。『広島市学

校教育史』(市教育センター)、『広島一中国泰寺高百年史』『修道中学校史』等々。さらに中学校の動向は『広島県史近代I通史V』『広島県議会史I』に詳細に画かれている。福山中学校については県立福山誠之館高校所蔵の『尋常中学福山誠之館第一年報』以下の年報が揃っており、『誠之館百三十年史』も利用した。『文部省年報』所収の広島県関係史料は常の通り参考にした。

## 大東文化大学文学部教育学科の増設

— 1972(昭和47)4月開講 —

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

1970(昭和45)年6月の大東文化学園の理事会・評議員会で、本学の事業計画を審議した結果、大東文化大学文学部に教育学科を増設すること(学部等増設)についても、(一)教育学科の入学定員は40名とすること、(二)開設の時期については、昭和47年4月1日(学科増設申請昭和46年度)とすること、(三)教育学科増設申請にかかる準備は管理部が総括し、経理部・教務部・図書館がそれぞれ職務を分担してその事務をおこなうこと、と定められたのであった。

関係図書や専門学術雑誌の購入、新設する学科教員の補充検討などを進めて、翌71(昭和46)年9月末に、中学校や高等学校の教員養成にとどまらず、新たに幼稚園や小学校の教員養成も担当しうのような「時代に即応した実社会と結びついた教育」をおこない、「教育研究の分野を開拓し」て、教育学士として教育界に君臨するように教育学科の増設の届け出申請がなされたのである。

新設される教育学科では、専門教育科目については、以下のとおり、定められた履修科目中より、76単位を履修しなければならないとした。ただし、外国人留学生については、第二外国語を含め計76単位以上を履修するものとする。教育学原論、教育史概説、教育社会学、教育行・財政学、教育心理学、教育方法論、教育学特殊講義一、教育学特殊講義二、教育学特殊講義三、教育心理学特殊講義一、教育心理学特殊講義二、講読一、講読二、講読三、演習一、演習二、演習三、教育課程論、生活指導、教育工学、学校経営論、初等教育原理、道德教育の研究、児童心理学、青年心理学、臨床心理学、幼児教育原理、であった。

なお教育学科の学生は、教育学科で指定する他学部他学科の専門科目を3科目まで履修することができるとした。教育学特殊講義および教育心理学特殊

講義中、2科目8単位以上選択必修とする。講読中、1科目2単位以上選択必修とする。演習中、1科目2単位以上選択必修とする。

教職専門科目は、教育実習、教材研究(国語)、教材研究(社会)、教材研究(算数)、教材研究(理科)、教材研究(音楽)、教材研究(図工)、教材研究(体育)、教材研究(家庭)で、教科専門科目は、国語学概説、日本文学史概説、書道、日本史概説、地理学概説、社会学、経済学、数学概論、物理学概論、化学概論、生物概論、地学概論、器楽一、器楽二、声楽一、声楽二、絵画、工芸、体育一、体育二、学校保健、家政学概論で、教職専門科目は、保育内容の研究(言語)、保育内容の研究(社会)、保育内容の研究(自然)、保育内容の研究(音楽リズム)、保育内容の研究(絵画製作)、保育内容の研究(健康)であった。教育学科での専門図書についても、3042冊(内国書2178冊、外国書864冊)が所蔵されているとした。

教育学科の教員組織については、次のとおりであった。教育学原論、初等教育原論、演習一を担当するものは、専任教授の神蔵重紀(明治43年2月生まれ、昭和10年・東京帝国大学文学部卒)、教育史概説、教育学特講一、道德教育の研究を担当するものは、専任教授の小杉巖(明治40年7月生まれ、昭和7年・東京帝国大学文学部卒)、教育心理学、児童心理学、演習三を担当するものは、専任教授の河内二郎(明治35年8月生まれ、昭和2年・東京帝国大学文学部卒)、教育心理学特講一、講読三、臨床心理学を担当するものは、専任教授の山根清道(明治44年8月生まれ、昭和13年・東京帝国大学大学院)、教育社会学、教育学特講二を担当するものは、兼任教授の清原道寿(明治43年7月生まれ、昭和10年・東京帝国大学文学部卒)、教育方法論、教育学特講三、講読二を担当するものは、専任助教授の庄司他人男(昭和10年7月生まれ、昭和42年・東京教育大学大学院教育学研究科修、教育学修士)、教育学原論、講読一、演習二、幼児教育原理を担当するものは、専任助教授の諏訪義英(昭和7年1月生まれ、昭和40年・名古屋大学大学院教育学研究科修、教育学修士)、教育心理学特講一、青年心理学を担当するものは、兼任講師の谷葉子(昭和9年7月生

まれ、昭和35年・お茶の水女子大学家政学部卒)、教育行・財政学、青年心理学を担当するものは、兼任講師の太田卓(大正13年7月生まれ、昭和27年・東京大学大学院人文科学研究科)、教育学特講三を担当するものは、兼任講師の松崎巖(昭和8年3月生まれ、昭和32年・東京大学大学院人文科学研究科修、教育学修士)、教育課程論を担当するものは、兼任講師の今野嘉清(昭和6年9月生まれ、昭和31年・東京大学大学院人文科学研究科修、教育学修士)、生活指導を担当するものは、兼任講師の竹内常一(昭和10年1月生まれ、昭和39年・東京大学大学院人文科学研究科修、教育学修士)、教育工学を担当するものは、兼任講師の井上光洋(昭和17年1月生まれ、昭和42年・東京工業大学理工学部卒)、であった。

翌72(昭和47)年1月、一、採用予定の教員については、予定どおりに確実に採用すること、二、学生定員を厳守すること、といった留意事項が付されたが、教育学科の増設(入学定員40名)が、届け出のとおり設置認可されたのである。ここで、教育学科の増設にあたっての注意を要することは、1970年6月の理事会で承認され、同年9月の学内準備の段階では、文学部内に教育学科を設ける案ではなく、新たに短期大学を設置し、文芸学部(定員100名)および教育学科(定員50名)を設けて、1972年度開講を目指すものと構想されていた点である。そして、本学の「将来の計画」として、教育学科を将来的により充実をはかっていき、教育学部設置の計画を抱いていると明示していたのであった。



## 大正時代の女子高等教育(69)

神戸女学院—Kobe College 高等科から専門部へ

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

### 神戸女学院—Kobe College

反動的国粹主義の最中、明治27年3月、400名の会衆を迎えて理科学館・音楽館の奉堂式を行った。この時、カレッジ程度の高等科を有する学校にふさわしく、英和女学校を“神戸女学院—Kobe College”と改称することを公表した。日清戦争の前兆がある時期で、キリスト教主義女学校の入学志願者は減少傾向にあった。この年の7月、普通科本科卒業生19名を出したが、高等科に進学したのはわずか2名だった。9月、普通科新入生も6名であった。在校生の中途退学者もあり、在籍数は72名となった。

一方で、26年11月以来、陸奥宗光外相の主唱に基づき、国別談判による条約改正交渉が再開された。27年7月、日清戦争開戦前に日英新条約が、同年11月には日米新条約が調印された。以後諸国との条約改正談判も進捗する見込みが立ち、従来の極端な排外主義がやや緩和された。28年7月、終戦を迎えた。

28年11月、創立20周年記念式を挙行した。創立者タルカット女史をはじめ、学院を支えてきた人々の挨拶があった。米国伝道会代表のブラッドフォー氏は“英米においても女子の高等教育の必要が認められたのはこの20年来のことである。女子教育に反対するのは、女子が聡明になれば夫の権威が低下するのを恐れる者にほかならない”などと演説した。しかし、日本の現状は、「西洋かぶれ」に対する批判が相変わらずあった。それが30年春、5年ぶりに日本に戻ったブラウン院長の病気を再発させた一因であった。

そこで、ソール院長代理は、世間の批判を和らげる方策を練った。戦争の犠牲者の傷病軍人とその家族を慰問することに信仰的意義を見出した。27年、神戸女学院規則にも「本院の目的はキリスト教の道徳に基づき普通教育を施し、以

て淑良有用なる女子を養成することにあり」と載せた。29年、学則改正に際して、音楽（箏曲）・点茶・生け花・作法等を随意科目とした。3年制の裁縫専修科（32年5月に廃止）を設け、高等小学校卒業者を入学させることにした。これら時代の要求に応える科目のために特別教室、日本風の2階建73坪余の1棟が30年11月に落成し、「尚藝館」と命名された。これは日本人有志の寄付により実現した。ソールはこれらの施設により国風尊重の実を示したのであった。

生徒数の減少で学校経営は困難を極めた。22年には授業料収入で年間支出の67%を支弁できたが、27年度には32%を支弁するにすぎなくなった。中部婦人伝道会が割り当て金を2,000円として維持をはかった。

### ソール女史第四代院長に就任

32年8月、ブラウン院長から引き継ぎ、ソールは正式に院長になった。32年2月、「高等女学校令」が公布された。同年7月に改正条約が実施されたため、外国の経営に主として依存する学校も3ヶ月以内に認可を受けなければならなかった。さらに同年8月に発布された文部省訓令第12号問題があった。「…課程外たりとも宗教上の教育を施し、または宗教上の儀式を行うことをゆるさざるべし」と明記され、宗教教育も宗教行事も禁止の通達であった。国家主義的教育の統制を目的として諸法令が公布されたことは明らかであった。学院が宗教教育の自由を保持しようとするれば、「高等女学校令」による高等女学校にならず、各種学校に甘んじなければならなかった。学院は各種学校に甘んじてもキリスト教教育は維持するという決断をした。しかし、各種学校では卒業しても上級学校に進学する資格が認められない。「高等女学校令」により、全国道府県や郡市町村及び私人が高等女学校を設置すれば、地方から都会に遊学する少女は減少する。東京や京阪神等の大都市に公私立の高等女学校が集中すれば多くの入学者を吸収する。それらの学校で4カ年の課程を修了した者は女子高等師範学校の入学資格を得る。しかし、各種学校では入学資格を得られない。キリスト教主義女学校にとって最大のピンチであった。

ところが、同じころ、「私立学校令」が公布され、私立学校は地方長官の監督下となった。学院は私立学校令による手続きを取り、32年11月認可を得た。これにより、式日には教育勅語を奉読しなくなることになった。こうした中で、生徒を確保するには、宗教教育学校独自の特色を発揮し、生徒が母校に残って高等教育を受ける機会をさらに豊かにするために、高等科の拡充を計るほかなかった。

### 学科組織の改正、学年始業を4月に改める

ソール院長は、創立以来学年開始は9月であったのを、32年4月始業に改めた。これによって入学者が増え、34年には200名を超えた。39年、普通科の入学資格を、5年制の高等女学校に準じて、高等小学校2カ年修了に改めた。普通科の上に修業1カ年の補修科を新設し、補修科を経て高等科に進学させることにした。普通科の学科課程を高等女学校に準じて名称を一部変更し、各学年とも週30時間とした。高等科3カ年修業は変わらないが、文科・理科の別を廃して、科目の大部分を全生徒の必修とし、ほかに理科・生物・哲学・数学・歴史・国文・漢文・ドイツ語・音楽の10科を設け、任意の1科を選ばせ、週に2~4時間専攻させた。

### 音楽科設置——関西唯一の音楽専修学校

新たに音楽科を設置した。音楽科普通科は、高等小学校2カ年修了を入学資格とし、修業年限5カ年、音楽科師範科は、学院普通科または高等女学校卒業後修業3カ年とした。音楽科の設置は、明治27年以来音楽を担当したE.タレー女史の苦心により実現した。関西唯一の音楽専修学校であった。

36年3月、「専門学校令」が公布された。修業年限は3カ年以上、入学資格は中学校または修業年限4カ年以上の高等女学校卒業と規定された。文部大臣の認可を得て、私人でも設置できる。「高等の學術技芸を教授する学校は専門

学校とす」という一般的な規定であった。したがって、私立専門学校は、自由に宗教教育を施すことができた。

41年度から尋常小学校の修業年限が2カ年延長されて6カ年の義務教育となった。それに合わせて普通科の入学資格を高等小学校2カ年修了から尋常小学校卒業と改めた。41年、学院は、補修科を廃して高等科第1学年に引き当て、高等科の修業年限を4カ年として、普通科に直結した。別に2年制の英語専修科を設けて、高等女学校出身者の英語補修に便利なようにした。

### 「専門学校令」による専門学校、「専門部」「音楽部」と改称

42年、学院はこれまでの実績があったため、専門学校令による認可を得て、4年制の高等科を「専門部」と改称した。また、普通科を「普通部」に、音楽科を「音楽部」と改称した。ちなみに普通部は後大正6年に「高等女学部」と改称する。当時は帝国大学以外に大学の設立が認められなかった。しかし、専門学校の中には大学となるにふさわしい実質的内容を備え、4カ年修業させる学校もあった。学院もそうした大学に匹敵する優秀な専門学校を目指して、4年制の「専門部」とした。

専門部は、学院の普通部、または英語専修科卒業者を無試験で受け入れ、5年制の高等女学校卒業者を試験の上で入学させた。『神戸女学院五十年史』によると、学科課程は以下のようである。数字は1週間の時間数を表す。

第一学年：修身（聖書）2・国語5・漢文4・英語6・数学3・体操2 週22時間

第二学年以上は、下記3種合わせて週20時間

必須科目：修身（聖書）・体操 全員が3カ年履修する。

主要科目：国語漢文・哲学・生物学・理化鉱物・英語

上記の5科から1科を、2年生の始めに選択し、卒業まで履修する。

随意科目：国語・漢文・数学・歴史・訳文・ドイツ語・音楽・図画・裁縫

毎学年初めに生徒の希望により申し出て履修する。ドイツ語は毎週4時間、他は毎週各2時間。

専門部の授業は、国語・漢文・哲学・訳文・図画・裁縫以外は、英語で行われた。

「音楽部」本科は尋常小学校卒業を入学資格とし、修業年限5カ年、師範科は4カ年程度以上の高等女学校卒業者またはこれと同等の学力を有し、かつ本科第2学年以上の音楽に関する素養ある者を入学させ、修業3カ年とした。

35年、日英攻守同盟調印、38年、米国ルーズベルト大統領の斡旋により日露戦争に勝利したことは、英語国民に対する日本人の感情を和らげ、英語教育を特徴とするキリスト教主義学校は再び注目を集めるようになった。41年来、普通部200名、専門部約25名を維持できるようになった。44年、専門部に「家政」学科を設置した。

### 校舎・設備の拡張

33年から大正時代にかけて、校舎・設備の修理・拡張を進めた。39年新たに1,000坪の市有地を20年期限で借り受け、木造3階建1棟345坪の普通科専用校舎を新築した。40年、3階建約450坪の赤れんが造りの総務館兼大講堂を新築、41年、体育館建築、築山を造り、石灯笼を据え、棕櫚の木を移植するなど庭を整えた。大正3年、木造2階建100坪の家斉館が新築された。11年、諏訪山小学校の旧校舎を買い取り、専門部用の教室等に改築した。その他専門部生徒の宿舍の整備、各館のランプから電灯への移行など着々と整備した。これらの工事費は、生徒団体や伝道区関係者の子弟の寄付と、米国伝道会がロックフェラー財団から受けた寄付金の一部が割り当てられて行われた。

ソール院長は世間の批判を和らげるために国風尊重の態度を示しながら、高等教育の充実、宗教教育の充実のために、着実に努力を重ねた。

### 参考文献

- 『神戸女学院五十年史』
- 『神戸女学院百年史』総説
- 『神戸女学院の125年』（1875～2000）
- 『神戸女学院のものがたり』

## 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(3):

### 『最近東京遊学案内』(明治40年)(1)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、個別の進学案内書に掲載されていた予備校の情報を見ていくことにする。今号で取り上げるのは、東華堂より刊行された受験学会『最近東京遊学案内』の1907(明治40)年のものである

同書は1905(明治38)年より1909(明治42)年まで毎年刊行され、その後1911(明治44)年に刊行され、1913(大正2)年からは受験学会ではなく東華堂編集部を著者として1918(大正7)年まで刊行されていることが判明している。1919(大正8)年からは書名を『最近東京諸学校案内』と変更し、1922(大正11)年まで刊行が続いた。ただ、筆者が集め得たものは、1905(明治38)年から1908(明治41)年、1911(明治44)年、1914(大正3)年のもののみである。

今号で取り上げる1907(明治40)年のものでは、「第四章 外国語学校」「第八章 雑種諸学校」に予備校と見なせるものが掲載されている。今号では、「第四章 外国語学校」に掲載されたものを取りあげる。この本では著者による学校の品評のようなものはなく、各種情報を「位置」「目的」「学科及修業年限」「学費」という項目を立てて純粋に情報を掲載している。以下、進学案内書に掲載された情報をそのまま掲載していくが、複数の項目をまとめる波括弧({})など、内容に影響のないものは適宜省いている。

正則英語学校

位置 東京市神田区錦町三丁目

目的 本校ハ正則ニ英語ヲ教授シ完全ニ英語ヲ活用スルノ士ヲ養成スル所トス  
学科及修業年限 本科ヲ分子予科、普通科、高等科、普通受験科、高等受験科、  
文学科、中学英語教員養成科、臨時受験科トシ別ニ夏季講習科ノ制ヲ設ク  
高等科、文学科修業年限ヲ三個年トシ受験科修業年限ヲ一個年ト定ム  
入学資格 入学セントスル者ハ品行方正、満十四年以上ノ男子ニテ高等小学ヲ  
卒業シ又ハ之ト同一ノ学カヲ有スル者タルベシ  
学費<sup>マツ</sup> 束修及ビ月謝ヲ定ムルコト左ノ如シ  
束修 午前部及午後部 金一円  
夜学部 金五十銭  
月謝 文学科 三学期 金十三円  
高等科及高等受験科 三学期 金十円  
普通科及普通受験科 三学期 金八円五十銭  
予科 三学期 金四円五十銭

### 青年会英語学校

位置 東京市神田区美土代町三丁目

目的 本校ハ各事業ニ従事シ又ハ高等ノ学校ニ入学セント欲スル者ヲシテ能ク  
普通ノ英文ヲ解シ若クハ談話、文章ニ英語ヲ活用スルニ足ルベキ人士ヲ養成セ  
ントスルニアリ

学科及修業年限 学科ヲ分子普通科、高等科トシ又別ニ選科、受験科会話専修  
科ヲ設ケ修業年限ハ普通科、高等科共各一個年ト定ム

入学資格 入学セントスル者ハ学齡満十二年以上ノ者ニシテ品行方正、身体強  
壯高等小学ノ課程ヲ卒ヘタル者又ハ之ト同等ノ学カヲ有スル者タルベシ

学費 学生入学ノ節ハ入学金トシテ金一円ヲ納ムベク尚在学ノ上ハ授業料トシ

テ普通科ニアリテハ一ヶ月金一円高等科ニアリテハ同金一円二十銭ヲ納付ス  
ルモノトス但シ会話専修科ニ限り毎月ノ授業料ヲ金一円五十銭ト定ム

## 国民英学会

位置 東京市神田区錦町三丁目

目的 本会ハ官庁及ビ会社銀行員又ハ高等ノ学校ニ入学セントスル者ノ為メニ  
主トシテ実用英語ト英文学ヲ教授スルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ分チ正科、英文学科、夜学正科、会話専修科、英語商  
業科、受験科ノ六科トナシ正科ハ二個年半、英文科、会話専修科ヲ一個年、夜  
学正科ヲ二個年英語商業科ヲ一個年半ト定ム

入学資格 本会ヘ入会セントスル者ハ品行方正、身体強健、高等小学ヲ卒業シ  
又ハ之ト同等ノ学カヲ有スル者ニシテ本会規定ノ入学試験ニ合格シタル者ナル  
ベシ但シ無試験入会者ニ限り之ヲ員外生ト見做スベシ

学費 入会金ハ入会ノ節束修トシテ金一円ヲ納付スベク尚ホ入会許可ノ上ハ左  
ノ区別ニ従ヒ会費ヲ毎月納ムベシ

英文学科 金一円二十銭

正科、正科夜科 金一円

会話専修科 金六十銭

英語商業科 金一円十銭

各科受験科 金一円

## 東京実用英語学校

位置 東京市神田区錦町三丁目

目的 本校ハ官立高等諸学校入学志願者、海外渡航者及ビ中等学校教育ヲラ



ントスル者又ハ英語ヲ要スル実業ニ従事セントスル者ノ為メ専ラ実用的ニ英語ヲ教授シ英語ヲシテ正確ニ活用シ得ル人士ヲ養成スルニアリ

学科及修業年限 学科ヲ分チ本科、受験科トシ別ニ毎年夏季講習会ヲ設ケ本科修業年限ヲ三ヶ年トシ受験科ヲ三ヶ年夏期講習会ヲ一ヶ月ト定ム

入学資格 入学ハ隨時之ヲ許可スト雖モ定員ニ満ソル場合ハ謝絶スルコトアルベシ尚ホ入学ノ許可ヲ得タル者ハ即時在学證書ヲ指定ノ日ニ呈出シ手續ヲ乞フベシ

学資 本校ヘノ入学志願者ハ入学金トシテ金五十銭ヲ納付スベク生徒在学ヲ許可セラレタル時ハ左ノ區別ニ随ヒ授業料ヲ徴収ス

受験科 金一円

本科第三年級 金八十銭

本科第二年級 金七十銭

本科第一年級 金六十銭

## 開成英語学校

位置 東京市麹町区飯田町四丁目

目的 本校ハ主トシテ実用ノ英語ト英文学ヲ教授シ諸試験ニ応セントスル者又ハ実務ニ従事セントスル者ノ為メニ必要ナル学科ヲ教授スルニアリ

学科及修業年限 学科ヲ分チ、初等、中等及ビ高等トノ第三級ニ区分シ各級ヲ通ジ修業年限ヲ三ヶ年ト定ム

入学資格 本校ヘ入学セントスル者ハ品行方正満十四年以上ノ男子タルベクシテ志願者ハ凡ソ試験ノ上相当級ヘ編入セシムベキ者トス但シ隨時女子ヘモ入学ヲ許可ス

学資 本校ヘ入学セントスル者ハ左ノ區別ニ随ヒ学費ヲ納付スベシ

束修 金一円

月謝 初等科 金六十銭

中等科 金七十銭

高等科 金八十銭

予備科 金五十銭

中央英語学校

位置 東京市本郷区向ヶ岡弥生町

目的 本校ハ青年子弟ヲシテ将来官立高等学校ノ入学試験ニ応セントスル者ノ  
為メニ実用英語又ハ高等英文学ヲ教授スルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ分チ午前部、夜学部、高等科、特別高等科及ビ会話専  
修科トシ修業年限ヲ三ヶ月ト定ム教授科目左ノ如シ

読方、釈解、会話、綴字、文法、習字、作文、翻訳

入学資格 入学セントスル者ハ品行方正、身体強壯高等小学校ヲ卒業シ又ハ之  
ト同等ノ学カラ有スル者タルベシ

学費 本校学費ヲ規定スルコト左ノ如シ

入校金 金一円

授業料 午前部 金一円

夜学部 金一円

高等科 金二円

特別高等科 金一円五十銭

会話専修科 金一円

次号では、「第八章 雑種諸学校」に掲載された情報を検討していく。

## 旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(9)

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

### はじめに

第104号より、旧制灘中学校の教育目標や生徒の活動についての史料を紹介する本シリーズを始め、顧問の嘉納治五郎や初代校長眞田範衛の教育方針に関わる史料をとりあげてきた。

本号では、灘中学校につながる私立中学の設立運動を1923年に開始し、灘中学校の幹事および首席教諭をつとめた曾我豊吉に関する史料を紹介する。

灘育英会常務理事の日高驥三郎が、1937年の第9回創立記念式の式辞で、灘中学校創設に関する曾我豊吉の貢献について、次のように述べている。

本校設置の首唱者は別に在るのであります。本校の幹事兼首席教諭である曾我豊吉氏が即ち其の人であります。曾我氏は当時御影師範学校教諭でありましたが、之を賛成して尽力する人々が出来就中前に述べました山邑太郎氏其外岸田杢、羽室庸之助、池原鹿之助の諸氏は大正十二年以来三年半の間不断尽力され私も其尻に附いて行動したのでありますが、容易に実現を見るに至りませず遂に絶望の域に達しました。然るに幸なことには両嘉納家は之を遺憾なりとし山邑家に謀られ、三家自ら設立者として名乗を上げられ、曾我氏と私とが犬馬の任に当りまして、永く東京高等師範学校長の職に在り現に貴族院議員たる我国教育界の耆宿嘉納治五郎先生を顧問に御願ひし、当時京都府立亀岡高等女学校長として令聞ありし現本校々長眞田範衛氏を迎へて御世話を願ふことになりまして、創立の事業が頓に進歩し上述の如く昭和二然十月二四日本校設置の認可を得、灘育英会の設立を了し続いて十一月第一期工事に着手し、昭和三年四月開校し昭和五年十一月全部の工事竣工

して遂に今日の盛況を見るに至つたのであります。本校に教育を受くる諸子は設立者に感謝すると共に此隠れたる所謂基礎工事の任に当たりし恩人のあることを忘れてなりませぬ。

(日高驥三郎「第九回創立記念式式辞」『灘』第21号、1937年3月1日より)

つまり嘉納治五郎顧問や眞田範衛校長の就任よりも前から設立運動を開始していた曾我豊吉が、設立しようとする私立中学校についてどのような教育目標を抱いていたのかを確認しておくことも、灘中学校の教育目標を明らかにする上で必要であるといえるだろう。

次号では、1923年12月の私立中学校の設置計画の発表時に宣言された「教育方針の要領」を通じて曾我豊吉らが、私立中学校の設立運動においてどのような教育目標をもっていたのかを紹介したい。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

## 短評・文献紹介

本年6月12日付の東京新聞(Webサイト)には、2023年度末に東京都から雇い止めされたスクールカウンセラー250名が、雇い止めの撤回などを求める意見書を都教育庁に提出したことが報道されていました。東京都のスクールカウンセラーが、基本的に1年契約の非正規公務員扱いであり、現場の学校側や子ども・父兄らの要望なども加味されずに、ときに契約更新されずに雇い止めが行われる・・というのは、とてもショッキングなニュースでした。新聞報道によれば、肝心の契約更新の選考基準も不透明だとされ、なによりも当事者である多くのスクールカウンセラーのみなさんとよく話し合っ、労働契約の判断措置がしかとなされていないというのは、現代の民主主義・法治国家ではなかなか理解が得られない行為であろうと感じました。昨今、教育関係者らの人手不足がとても悩ましいと叫ばれているなかで、なぜ?このようなことが生じるのか、不思議でなりません。(谷本)

授業やニューズレターのネタにできたらと思いながら、購読している新聞から面白そうな記事をスマホで切り抜いて(最近では写真にとって)集めている。そんな中、右のような「学徒出陣 失った未来」(『朝日新聞』2023年10月22日)という記事に目が留まった。80年前の1943年10月21日に東京の明治神宮外苑競技場での学徒出陣壮行会があったことをとりあげた記事だが、当時東京帝国大学経済学部1年生だった町田保氏(99歳)の証言とともに、慶應義塾福沢研究センターの都倉武之氏への「「学徒出陣」の歴史から何を学ぶべきなのか」のインタビュー記録(聞き手・後藤遼太記者)が掲載されている。



記事の切り抜き写真

このインタビュー記録なかで、例えば次のような文章があった。「軍事教練の必修化や課外活動の制限など、学内も軍事色が徐々に強まった。医学など「戦争の役に立つ学問」を奨励することは現代でもある。国際ランキングを根拠とするなど昔と変わっているようにも見えるが、政府の基準で峻別する構図は変わらない。当時の大学関係者には、「譲るところは譲る」姿勢があった。一歩ずつ後退し、気付けば選択の機会も無くなっていた。それが「学徒出陣」だ。一般の読者を対象とした新聞記事のなかで、学徒出陣の問題を「戦争の役に立つ学問を優先する国の態度」という現代にもつながる視点から取り上げている記事は珍しいのではないだろうか。都倉氏の談話とともにインタビューをまとめた後藤氏の力量に感心した。(富岡)

---

## 会員消息

---

本年5月26日の東京新聞(朝刊)を読んでいて、現代の人工生成AIカメラ機能を活用して、乳幼児のうつぶせ寝による事故防止(安全確認)など、保育士とともに乳幼児をきめ細やかに見守る・・という記事は、日常業務であまりに忙しい保育士の負担を少しでも軽減させ、子どもたちに寄り添う環境をサポートできるのではないかと感じました。ただし、保育学の専門家らが当たり前のごとく注意喚起するのは、人工生成AIはあくまでヒューマンエラーを防ぐのに役立つもので、AIに任せきりではなく、保育士と二重チェックしながら乳幼児らの不慮の事故を未然防止していくべきだということです。なお個人的に少し気になったのは経費面の点ですが、これも新聞報道では、初期費用が約50万円、月額利用料が園児12名までの場合で1万円(国・自治体の補助金の利用可)とあり、国立研究開発法人理化学研究所発のベンチャー・リケナリスが開発し、首都圏各地でもっか導入されはじめているそうですよ。(谷本)

今年の5月に「国土交通行政インターネットモニター」を拝命しました。大学生の時に、「少し知っていること」と「全く知らないこと」は全然違う!という言葉に出会ってから、どんなことにも、とりあえず挑戦しようと思うようになりました。これまでも、「兵庫県県政モニター」「明石市海岸モニター」「明石市道路モニター」「姫路市市政モニター」「姫路市水道モニター」「神戸市ネットモニター」など、様々なモニターに応募してきました。これからも、コツコツいろんなことに挑戦しようと思います。(八田)

昔は、資料を神保町の古本屋街に探しにいたり、早稲田の図書館でコピーしたりしていましたが、今は国立国会図書館のデジタルで読めてしまう。「えー、これも読めるんだ!」と、「インターネットで閲覧できるものに絞る」で、読めるときのうれしさ。でも、あれだけ、苦労して探していた時間は、一体なんだったんだ。(山本剛)

1980年代に京都大学吉田寮に住んでいた関係で吉田寮を含む大学の学生寮の歴史に関心を持っていますが、その吉田寮の関係で読売テレビの記者に近畿大学まで取材に来ていただきました。そのときの内容を1分間ほど、6月24日の特集番組(第114号の発行日より後にニューズレターを書いていて申し訳ありません)の一部分としてとりあげていただきました。放映後、Youtubeでも公開されています。研究室が汚いことも公表してしまっていて恐縮ですが、よろしければご覧ください。

読売テレビかんさい情報ネットten「京都大学・吉田寮 日本最古の学生寮で育まれた「文化」とは!?(2024年6月24日。12分間)

<https://www.youtube.com/watch?v=zQvjYW5hQMA>

吉田寮関係では、関西の歴史建築ドキュメンタリー映像を多数制作されている若林あかね氏の「吉田寮は語る」(2023年)でもインタビューを取り上げていただきました。以下から英語字幕つきバージョンをご覧ください。

「吉田寮 英語版」(1分35分)

<https://www.youtube.com/watch?v=OGhvnwiCjIM&t=339s>

また若林氏の最近の記録映像「旧加古川公会堂」(2024年)は、築90年を迎える兵庫県加古川市にある旧公会堂の建物について、建物ゆかりの方々、思い出や専門家による建物解説、ドローン撮影映像などから構成されていて、歴史的建築物の保存・活用の必要性や可能性を具体的に伝えてくれる作品だと思います。ぜひご覧ください。

「旧加古川公会堂」(63分)

[https://www.youtube.com/watch?v=zp\\_BLBAG9k0](https://www.youtube.com/watch?v=zp_BLBAG9k0)

これまでもお知らせしています旧制高等学校記念館(長野県松本市)の第28回夏期教育セミナー(2024年8月31日・9月1日。対面開催)の詳細が研究発表のテーマも含めて、同館ホームページで公開されました。ニュースレター同人と読者の皆さんにぜひ松本でお目にかかりたいと願っています。事前申し込みが必要ですので、よろしく願います。

旧制高等学校記念館「イベント案内」

<https://matsu-haku.com/koutougakkou/event>

(富岡)

大変ご無沙汰しております&初めまして。長年投稿しておりませんが、レター同人をさせていたいております、徳山です。

2021年に同人の方(全員ではないのですが・・・)に、私の出身である京都大学農学部の百周年記念誌の執筆に携わることになったとお知らせしたのですが、2023年11月に『京都大学農学部100年史』として無事発行されました。(すぐにお伝えすべきだったのですが、バタバタとしており、失念しておりました。)

いわゆる理系学部の学部史としては異例の、通史編が充実の約200頁、私が担当した戦前編は60頁のボリュームになっており、戦争・植民地・学生運動など、本全体を通じて包み隠さない方針(?)のもとで編纂されております。京大の他、農学系の学部・学科のある大学に所蔵されておりますので、ご関心がおありの方は手にとっていただけますと幸いです。レターにもいつか紹介文を・・・と思いながら、どうしても今は執筆する余裕がありません。いつか書かせていただきたいと考えています。(徳山)